

草の根の表現者たち（第3回）

佐藤一子（さとう・かつこ）

ゆずりの葉少年少女合唱団の澄んだ歌声が被災地東北の人々の心に響く

ゆずりの葉少年少女合唱団コンサート 2015 ーひとつー

2015年9月13日午後、宮城県塩竈市民交流センター遊ホールでゆずりの葉少年少女合唱団の定期演奏会が開かれた。団員は小学校1年生から中高校生・大学生まで男女30人余り。指揮は三神博子さん、ピアノは本多葉子さん。370席あまりの会場には、団員の保護者・親族や友人など知り合いと思われる人々が多数集まり、あたたかな雰囲気が広がっていた。

オープニングは宮城のわらべ歌「あれ流れの」「こめこめ米屋」。第一部では各地のわらべ歌の軽やかな歌声が会場に広がった。第二部は中高校生男子も交えて、谷川俊太郎／詞 木下牧子／曲の「春に」「二十億光年の孤独」、スメタナやシューマンなどの外国の合唱曲で混声合唱の美しいハーモニーが奏でられる。そして休憩後は「わらべ歌で遊ぼう」の時間。マリつきや手合わせなど、舞台は子どもたちがのびのびと動き回る遊びの空間となる。

第三部は「トトロ・メドレー」はじめスタジオジブリ作品が次々と歌われた。「もののけ姫」と「テールの唄」は団創設時からの団員で、今はOBの本多和樹さんの編曲。第四部では、ゆずりの葉が大切にしている曲が、卒団したOGOBもまじえて、心をこめて歌われた。「しあわせ運べるように」（臼井真／詩・曲）は阪神淡路大震災の鎮魂の曲で、臼井さんから直接指導を受け、復興祭やボランティアの集会で必ず歌っている。

今回の演奏会のテーマでもある「ひとつ」は、この春卒団した前団長の佐藤文亮さんの作詞による作品で、被災地復興プロジェクトの合唱祭にむけてドイツ在住の音楽家江村玲子さんが作曲した。若者らしいやさしく芽生える思いに希望を見出すような歌である。

「知らないことばかり 答えはどこにもない ただ確かなこと 願いはひとつ かもめがさくらを運んできたら それが合図 今あなたと歌いたい さあ声を合わせて 春は巡って そして新しい明日の予感」

会場に響きわたる透明感のある混声合唱のハーモニー。最後に団の愛唱歌「ほほう」（工藤直子／詩 横山潤子／曲）が歌いあげられると、舞台と会場は深い一体感に包まれた。

わらべ歌の会から高校生・大学生も参加する混声合唱団へー13年の歩み

ゆずりの葉少年少女合唱団は月3回、塩竈市民館・エスプで練習をしている社会教育の登録団体である。2014年度には日常の練習と合宿練習。そして地元の幼稚園のクリスマスコンサートや公民館まつり、復興の詩プロジェクトコンサート、災害公営住宅完成式、塩竈駅竣工式・イルミネーション点灯式の出演など、年間10回以上のコンサートを行っている。

2011年3月の東日本大震災の後、地元のホールや公民館の多くが避難所となり、練習もできないまま11月に京都で開催された国民文化祭に参加した。以後、海外や全国から被災地にやってくるボランティアの前で上演する機会も多くなった。沖縄県糸満市から塩竈市役所に派遣されていた職員もその歌声に感動し、その縁で、今年12月、糸満市のクリスマスコンサートに招待されることになった。多賀城市民合唱祭、宮城県合唱祭、しおがま音楽のつどいなどを通じて、地元の音楽団体との交流も広がっている。

2002年6月の団発足から13年の歩みは決して順調ではなかった。三神さんは武蔵野音大声楽科卒業後、ハンガリー・ドイツ・ザルツブルクのヨーロッパ幼児音楽教育研修の旅に参加、コダーイの音楽システムに深い感銘を受けた。合唱の盛んな出身地福島県郡山市で、高校時代のコーラス部顧問の恩師から「継続は力」と励まされてきたことをみずからの音楽活動の信念として、わらべ歌にもとづ

く音楽指導、わらべ歌で遊ぶ子どもたちの活動を広げてきた。塩竈子ども劇場で武蔵野音大同窓の本多さんと出会い、「わらべ歌を歌い、そして遊ぶことを通して、子ども達が仲間との関わりを体験し、仲間の存在を感じながら歌い合わせる合唱団」を育てたいと意気投合して団を創設し、13年間共に歩んできた。

しかし、わらべ歌の遊びを楽しみにして集まる子どもたちも、成長とともに塾や学校の部活で忙しくなり、声変わりを機にやめていく子どももいる。年少と年長の子どもたちの練習を一体化させるよう模索し、年長男子のレパートリーを生み出しながら、混声合唱団としての音楽的な表現を追求してきた。2人の指導者の試行錯誤のなかで育ってきた佐藤文亮さん（23歳）は、「ボーイソプラノを失っても、新しい曲が歌えるようになって、そこから世界が広がっていく喜びがある」と語る。現団長の東瀬昇大さん（高校3年）も合唱を楽しむ仲間との一体感を大事にしており、「この団はコンクールに出て競うのではなく、自分たちの中でいいものにしようという気持ちが強い」と語る。成長した青年たちが若い後輩を思いやる。そのことが美しいハーモニーを生み出しているのである。

大震災の現実にもきあい、共に歌い育ちあってきた少年少女たち

東日本大震災で身近な親族や友人が被災した悲しみをかかえながら、2012年に十周年記念演奏会を開いた。三神さんは「大きく変わったのは子どもたち。震災以後、一生懸命歌うと聴いている人々に伝わる、届いているのがわかる。聴き手との一体感、強いつながりを実感している」と合唱団の歩みをふりかえる。

十周年を経て、団発足以来共に活動してきた子どもたちの数名が成人して卒団し、団の活動も節目を迎えた。それから3年を経て開かれた今回の定期演奏会は、新たに入団した子どもたちも含め、後輩たちにバトンタッチされた、文字どおり葉の生まれ変わった「ユズリハ」そのものの姿であった。打ち上げ会でOGOBから創作曲「その言葉」（佐藤文亮／詩 本多和樹／曲）のサプライズプレゼントがあった。

「いつもそばにいてくれるその言葉 幸せを宇宙のはるか遠く あの星のむこうまで」

育ちあい、生まれ変わるゆずりの葉。わらべ歌を楽しみ、生活の喜びの表現を大切にしてきた少年少女合唱団は、子どもたちの成長と共に交流の輪を広げつつある。

<写真>ゆずりの葉少年少女合唱団の合唱（団関係者提供）

